

## 父には裏切られたが 一のろいではなく祝福を一

### 桐山 壘

桐山壘さんは29歳で、2児の父。東京都大田区南六郷にある垂穂キリスト教会の牧会スタッフの一人である。お父さんがフランス人で、お母さんが日本人。ハーフとして日本で生まれ育った壘さん自身にはフランスでの生活経験はなく、フランス語は話さない。

芸能界ではハーフがもてはやされるような印象があるが、家庭生活や日常生活はどうなのだろう。桐山さんがどのようにして天の父を知るに至ったのか、垂穂キリスト教会でお話を伺った。

一桐山さんのお父さんは、カトリックの神父さんだったと伺いましたが。  
桐山 はい、フランスのカトリック教会から派遣された修道士でした。

一そのお父さんが、どうして修道士をやめたのでしょうか。

桐山 父は28歳で日本に来たんですが、日本の禅などの精神世界にふれて、信仰を捨て自分の力で生きていくことを選んだようです。

カトリック教会では、まず日本の文化芸術などを学ばせて、それからいろいろなところに配属するようです。ですから、父は日本について徹底的に勉強させられて、日本語もみっちり仕込まれました。

信仰を離れたのは、そのトレーニングが終わり、さあこれから神父としての按手を受けるという直前だったようです。修道士をやめたあと、父は哲学に興味を持ち、フランス哲学の勉強を始めました。そしてフランス語の専門学校などで教師をして生計を立てていました。

最終的には、大学の講師（のちに助教授から教授）になりました。今年の3月で定年を迎えました。大学教授としては順風満帆で、テキストを作り、辞書を作り、NHKで教えたりして、フランス語の先生としては順調でした。

父と母は、バッハを歌うサークルのようなところに所属していて、そこで出会いました。父はずっと日本でやっていくつもりだったので、日本の女性と結婚したかったようです。母はフランスに留学したこともあり、フランス語が話せました。

3年ほどして僕が生まれました。3歳下と7歳下の妹がいます。

### 離婚の話が出る

一桐山さんは、この垂穂キリスト教会には子どもの頃から来ておられたと伺い

ましたが。

桐山 小学校4年生の頃だと思いますが、この教会に来ている家族の子どもがクラスメイトにいて、その子に誘われて教会学校に来ました。お菓子がもらえるし、アイスクリームが食べられるし、とってもいい印象を持ちました。教会のキャンプにも行きました。

ちょうどその頃、母もこの教会の聖書の学びに出ていたみたいです。求めてはいたようですが、信仰を告白するとか洗礼を受けるまでには至らなくて、2～3年で来なくなりました。

僕も小学校の高学年から中学生までは教会とは無縁だったんですが、16歳の高校1年生の時に両親の離婚の話が出ました。そのことで、母は体調がおかしくなるくらい苦しみました。

一離婚の話は、お父さんのほうから出たのですか。

桐山 父が愛人をつくってしまって、子どもができたと言うのです。それで「愛人と暮らしたいから、別れてほしい」という話でした。離婚が成立するまで3～4年かかりました。

実際には別居して、週末には父が帰ってくるという異様な生活をしていました。僕たち子どもにも母にも大変な3～4年でした。

それをきっかけに、母がまた教会に来るようになりました。それに連なって、子どもたちもこの垂穂教会に来るようになりました。

僕は、イエスさまの十字架、復活、罪の赦しなどは分からなかったのですが、この教会で「神さまがいる」ということが分かるようになりました。

父にひどく裏切られ、「ああ、誰も信じられない」という思いがありました。「家族という一番近い存在なのに、こんなに簡単に裏切ることができるんだ。人を信じちゃいけないんだ」と感じました。

「父を取り返そう」と思ったら、やりきれなくなります。ある意味で、「心の中で父を切り捨てた」というか、そんな決断をしたと思います。

けれども、僕の中にすごく空しいと言うか、渴いたところがあって、教会で清野隆二兄弟（この教会では、牧師を先生と呼ばない）から「天のお父さまがいる、最後まで愛してくださるお父さまがいる」と言われて、ピタッと来たんですね。

自分の罪といったことはまだよく分からなかったんですが、「自分を本当に愛してくださっている方、天のお父さまがいるぞ」という感覚でしたね。「これは本当に確かなことなんだ。ここで生きていけるんだ。生きていこう」という思いが与えられたんです。17歳の時です。

17歳の5月25日に、母と上の妹と、3人で洗礼を受けました。その半年後には、下の妹も受洗しました。父以外はみな救われて、今も主にあって歩んでいます。（以下省略）